

次回 企画展

文と絵で伝える地域の歴史 「浜松今昔物語」



平成 28 年 2 月 1 日 (月) ~平成 28 年 4 月 24 日 (日)

磐田市在住の郷土史家「小林佳弘氏」(ほんふきん出版編集長)は、姫街道「本坂通 今昔物語」・「静岡県内「信州街道」塩の道今昔物語」など、多くの書籍を著しています。その本の表紙絵や挿絵を担当しているのが、洋画家の「大須賀義明氏」です。

今回は、「姫街道」「塩の道」などの街道に視点を当て、「京丸牡丹」や「山住神社」、「勝坂神楽」など、広く「浜松市」に残る数々の史実を、お二人の文と絵で紹介します。

浜松文芸十人の先駆者紹介

その6



《自立を謳う女性先覚者》 ^{たかの}鷹野つぎ

「鷹野つぎ」は、明治23年浜松町下垂(現浜松市中区尾張町)に岸家の二女として生まれ、本名は次。浜松高等女学校(現浜松市立高等学校)に入学、校長田辺友三郎(童謡「モモタロウ」の作詞者)の影響を受け文学に関心をもつ。

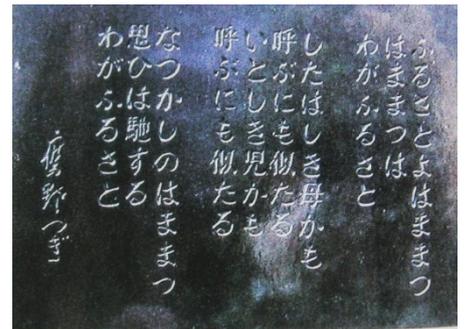
明治40年女学校を卒業後程なく、長野県出身で地方新聞の記者であった鷹野と出会い結婚。その後、島崎藤村に師事し、藤村の後援のもとに創刊された女性雑誌『処女地』の誌友となる。同誌でもっとも実質的な文学活動をし、作家として認められたのは彼女一人であった。

しかし、大正12年の関東大震災で夫は退社をし、大正13年には、つぎ自身が結核に冒され生活は一変する。夫が起こした家業も不調で、つぎは病苦と貧困の中で過ごすことになるが、こうした中でも執筆活動を続けた。

著作は、8人の子供のうち6人を病魔で失った悲しみを綴った『感想集・子供と母の領分』『随想集・幽明記』『四季と子供』等11冊である。

作品には望郷の思いが込められ、浜松は、生涯を通じて離れることがなかったようだ。

昭和18年3月19日、結核のため死去。享年54歳



浜松市立高校にある詩碑

浜松文学紀行

加藤雪腸宛て石川啄木書簡（つづき）

啄木が土岐哀果に注目したのは、作風に共通点があったからである。当時二人は、短歌形式に揺さぶりをかけた俳諧的な実感歌の作者として注目を浴びていた。翌年の4月、啄木と哀果は新雑誌「樹木と果実」を創刊しようとした。この雑誌は日のめを見ることはなかったが、二人の関係はその後もつづき、啄木の死後刊行の第2歌集「悲しき玩具」は、哀果の尽力があって出来たものであり、題名も歌の一節をとって哀果が命名している。

啄木の手紙は次のようにつづく。

- 4 「曠野」のことは一向に存ぜず、原稿はやり候へど小生は初めより不確な雑誌と思ひ居候、たとひ出るにしても長つづきは致すまじく候
- 5 古代の歌集にて現在愛読いたし居るものは一冊も無之候
- 6 歌人の読むべき雑誌とは歌本位の雑誌の事に候や、若し然らば「創作」「スバル」の二つなるべく候

終わりに臨み小生は歌を作ることが小生の第一条件にては必ずしも有らざることを御諒解あらんことを希望仕候

作歌の事に一身を捧ぐるも世の中には有之候へども、小生にはどうしてもそれが出来ず候、これ若し小生の歌の時として不真面目なりとの評を蒙る所以ならん、小生が歌に於て心がくる所は唯「嘘をつかぬ」といふ一事のみに御座候、そのほか何も無く候

兄は社会主義といふものに対していかなるお考へをお持ちなされ候や、機会あらばお洩らし下されたきものに候 草々

十一月二十九日 石川生拜

加藤孫平様 侍史

4については、啄木の年譜によると同年の『曠野』七号にエッセイ、九号に短歌15首を寄稿しているが、啄木はそれが雪腸の出している雑誌だと気付かなかったのか、「長続きしないだろう」と厳しい言い方をしている。この手紙の翌年雪腸は地元在住のアララギ派の歌人柳本城西主宰の「犬蓼短歌会」に加入、作歌2年後の大正2年に短歌結社「曠野」を創立し、本格的に短歌の振興に乗り出している。

6に出てくる「創作」は、啄木の最期を病室で看取った若山牧水主宰の短歌雑誌のこと。「スバル」は前年の明治42年（1909）、与謝野鉄幹主宰の「明星」廃刊後、森鷗外と鉄幹・晶子夫妻を中心に発刊された浪漫派の文芸雑誌である。創刊号の発行人は啄木であった。

「歌を作ることが小生の第一条件ではない」は、明治42年4月の上京後啄木は小説家として名を成すべく次々と作品を発表したが、ほとんど評価されなかった。その失意のなかで心に浮かぶさまざまな思いなどをつづったのが短歌であった。彼にとって第一義はあくまでも小説であり、短歌ではなかったのである。社会主義云々は、半年前の「大逆事件」の報道によって、啄木は急激に社会主義思想に傾倒しつつあった。雪腸にもそのことについて聞かすにはいられなかったのであろう。